京都大学グリークラブOB会
@HOME CONCERT 2012 KYOTO

男声合唱組曲「みどりの水母」増補改訂版初演　特別演奏会

賛助出演：京都大学グリークラブ

2012年9月1日（土）
京都府立文化芸術会館

Welcome!

本日は、京都大学グリークラブOB会特別演奏会、
@HOME CONCERT 2012 KYOTOにお越しいただき、誠にありがとうございます。
おかげさまで京大グリーは今年で創立47年目を迎えます。
半世紀にわたる歴史を重ねて、会員数も500名におよぶ団体となりました。
本コンサートはグリー現役諸君の賛助出演を得て、OBと現役が同じステージに立つ初の試みです。
学生、そして卒業間もないフレッシュマンから前期高齢者領域に突入するベテラン層まで、
幅広い世代が共に歌う楽しみを、皆様にも共感していただければ幸いでございます。
特に今回は、私たちの大先輩である多田武彦先生が当クラブのために書き下ろしてくださった
男声合唱組曲「みどりの水母」の増補改訂版を、OB・現役合同で初演する幸せに恵まれました。
先生には過日練習にもお運びいただき、熱心にご指導賜りました。あらためて厚く御礼申し上げます。
また本日は他にもクラブの記憶に焼き付いた、思い出深い曲をお聴きいただきます。
若い声、成熟した声、世慣れした声、枯れた声、様々に入りまじってはおりますが、
「歌うことは、歳をとるから止めるのではない。歌うことを止めるから歳をとるのだ」と
心に念じて、私たちのコンサートの幕を開けたいと存じます。
もちろん、私たちの道楽をいつも支えてくれている家族・友人に心からの感謝をこめて。

主催：京都大学グリークラブOB会

Program

京都大学　学歌

作詞：水梨彌久
作曲：下総皖一
編曲：多田武彦

Stage Ⅰ（指揮：藤田正浩）

■**Magnificat Quarti Toni**
第４旋法によるマニフィカート　　作曲：G.P. da Palestrina

Stage Ⅱ　合同演奏（指揮：藤田正浩）

京都大学グリークラブ 1976 年委嘱作品

■男声合唱組曲「みどりの水母」（増補改訂版初演）

作曲：多田武彦
作詩：大手拓次

Ⅰ.睫毛のなかの微風
Ⅱ.夕暮の会話
Ⅲ.秋
Ⅳ.雪のある国へ帰るお前は
Ⅴ.みどりの水母
Ⅵ.汝がこゑの美しさ

~Intermission~

Stage Ⅲ　賛助出演　京都大学グリークラブ（指揮：松本朋大）

■男の歌（**Men's Songs**）より　　作曲：Veljo Tormis

Stage Ⅳ（指揮：藤田正浩）

■**Harvard Glee Club 交歓愛唱曲集**

Viva Tutti	18th Century Glee
Glorious Apollo	作曲：Samuel Webbe
Beati Mortui	作曲：Felix Mendelssohn
Ave Maria	作曲：Franz Biebl
最上川舟唄	作曲：清水　脩

男声合唱組曲「みどりの水母」（増補改訂版）誕生記

2011 年 8 月 16 日

多田　武彦

1973 年から 4 年間、私は郷里大阪市に隣接する堺市に単身赴任していた。翌々年某日、当時、京都大学経済学部 3 回生の志水雅一さんが、私の職場を訪ねてきた。彼は京都大学グリークラブのメンバーで、合唱音楽についても造詣が深かった。話の主旨は、「来年、京大グリーは創立 10 周年を迎える。この機会に、多田さんに新曲を作曲してもらって、学生指揮者として初演をしてみたい」とのことであった。私は、真摯に語る志水さんの熱意に絆されて、内諾をした。

♯　　♭　　♪

一方私は、1953 年に京都大学法学部を卒業するまでは、「将来はミュージカル映画の監督になろう」と思っていたが、家庭の事情で銀行に就職した。学生時代に、音楽の薫陶を受けた作曲家・清水脩先生（故人）を訪ね「それまでの貴重なご教示への御礼・就職の報告・音楽との離別」を申し上げた処、先生から「日曜作家として一年一組曲を書き残していけば‥‥」との助言を受けた。爾後 20 年間に（勤務先の、二度の超繁忙期には、作曲の中断を余儀なくされたが）約 30 の合唱組曲を作曲した。そして前述の単身赴任時の休日に、3 年振りに創作を再開し、男声合唱組曲「尾崎喜八の詩から」を書き上げた。更に、単身赴任中に一つでも多くの作品を作ろうと、詩人大手拓次・三好達治・中原中也・伊藤整ら諸先生の詩を選び続けてきた。志水さんの依頼に即応して、作曲したのが男声合唱組曲「みどりの水母」（原作・5 曲編成）である。1976 年。志水雅一さんの指揮・京都大学グリークラブ諸兄の演奏により、名初演が行われた。

♯　　♭　　♪

卒業後日本専売公社（現・ＪＴ）に就職した志水さんも、単身赴任を終えた私も、我が国の経済社会の激変に打ち克つべく東奔西走している間に 30 年の歳月が流れたが、合唱音楽が取り持つ縁で、志水さんとの音信は続いた。昨年（2010 年）、既にＪＴの副社長にまで栄進していた志水さんから、或る相談があった。主旨は以下のとおり。

志水氏：組曲「みどりの水母」の出版予定は？

多　田：私の既作品のうちの幾つかは改訂を行った上、出版しようと思っている。組曲「みどりの水母」も、終曲を改訂するか一曲加えた増補改訂版を作ってみたいと考慮中だ。処で志水さんの率直な意見は？

志水氏：組曲の構成上も、演奏上の観点からも、永年、終曲が気になっていた。ぜひ増補改訂版の誕生を期待したい。

♯　　♭　　♪

今年 6 月に、京大グリーのＯＢで、京大グリーＯＢ会の指揮者・藤田正浩さんから、今年 2 月ハワイで開催された「ハーバードグリーＯＢと京大グリーＯＢ会のジョイントコンサート」のＣＤが送られてきた。京大グリーＯＢ会の「演奏上の構築性・日本語の歌詞の適切な抑揚感・アンサンブル」の上達ぶりは見事だった。当面の委嘱作品が完成した直後だったので、終曲に一曲を加え男声合唱組曲「みどりの水母」（増補改訂版）を、2011 年 8 月 16 日完成させた。（原作の 5 曲にも隈なく目を通して推敲した）

原作の 5 曲は、「多くの人の心を通り過ぎる喜怒哀楽を、日本の花鳥風月を以て包み込んだような大手拓次先生の詩情」に寄り添って作曲したが、増補改訂版の終曲には、「（演劇や音楽のエンディングに古今東西の名作家たちがよく用いる）前作に展開された様々な詩情への追憶と、そこからの昇華」を伝えようとした「汝がこゑの美しさ」を配した。永年気懸りだったこの組曲が、私なりによい作品となり、安堵している。

Program Note

Stage Ⅱ

京都大学グリークラブ 1976 年委嘱作品

■男声合唱組曲「みどりの水母」（増補改訂版初演）

時を越えた合作、世代を越えた合唱

第 10 回定期演奏会での初演(＊)以来、再演されず、楽譜も出版されなかったこの曲を本日「増補改訂版」として初演できることは、私たちグリーメンにとって大きな喜びであり、その機会を頂戴した多田武彦先生に深く感謝申し上げます。

作詩者の大手拓次（1887-1934 年）は、群馬県の温泉旅館の家に生まれ、早大を卒業後、ライオン歯磨本舗に入社して広告係として勤めました。同時代の詩人ともあまり付き合いが無く、唯一、北原白秋を師として仰ぎ、ボードレールなどのフランス象徴詩を唯一の友として過ごします。また、小さい頃から病弱で入退院を繰り返したこともあり、女性に対する憧れを詩に託すのみで、生涯結婚することはありませんでした。

拓次は、「薔薇の散策」などの詩によって薔薇の詩人とも言われていますが、この組曲中でも水母（くらげ）や狼が登場しているように、蛇や蟇など様々な動物が登場する象徴詩が多いことも特徴です。北原白秋も大いに彼の詩を評価しており、死後になりますが、「藍色の蟇（ひき）」「蛇の花嫁」等の詩集が出版されました。

本日演奏する増補改訂版は、組曲全体を象徴する【睫毛（まつげ）のなかの微風（そよかぜ）】に続き、【夕暮の会話】の「不安定さ」、【秋】の「青春の熱情」、【雪のある国に帰るお前は】の「いらだち」、【みどりの水母】の「やるせなさ」等、様々な詩情が四季に織り交ぜて歌われた後、今回追加された【汝がこゑの美しさ】で前 5 曲全体を追憶し、昇華させるという構成となっています。

通常、合唱曲は詩人と作曲者の合作ですが、この増補改訂版は、詩人と 40 年前の多田武彦先生、そして現在の多田武彦先生という３者の合作と言えるかもしれません。

私たちもＯＢ・現役合同で 40 有余年の年齢差を超えて、同じ思いを込めて演奏します。

（藤田　正浩）

(＊)京都大学グリークラブ第 10 回定期演奏会
初演日　昭和 51 年 12 月 6 日
会　場　大谷ホール（京都）
指　揮　志水　雅一
合　唱　京都大学グリークラブ

Stage Ⅰ

■第四旋法によるマニフィカート

“Magnificat”「わが魂は主をあがめ」は、受胎告知を受けた聖母マリアが主をたたえて歌う、喜びに満ちた輝かしい賛歌です。出典はルカ福音書第１章46～55節。ファンタジックでロマンティックな記述の多いルカ伝にあっても、ひときわ美しい詩文で綴られています。

作曲はルネサンス最大の作曲家パレストリーナ（c1525-1594)、単旋律によるグレゴリオ聖歌と多声合唱が交互に歌われます。

京都大学グリークラブは、創立以来、男声合唱によるポリフォニーを演奏の軸のひとつとしてきました。パレストリーナの”Stabat Mater” , ”Missa Aeterna Christi Munera” ,バードの「三声のミサ」等の演奏経験を踏まえ、第５回定期演奏会（1971年）にて、音楽学者・合唱指揮者の皆川達夫先生に客演指揮のご指導を仰ぎ、この曲を演奏いたしました。京都会館第２ホールにおけるこの演奏は、私たちグリーメンにポリフォニーという古楽の形式を超えた新鮮な音楽的衝撃を与えました。

Stage Ⅳ

■Harvard Glee Club 交歓愛唱曲集

1990 年に始まったハーバード・グリーＯＢとの交流コンサートは、これまで日米で計８回に及んでいます。その中で愛唱された曲から、印象深いものを選びました。

Viva Tutti（カワイ子ちゃん万歳！）

17 世紀に英国で始まった男声合唱運動から生まれたグリーで、いわば酒場のざれ歌です。90 年初のコンサートでのハーバード名誉教授、故フォーブス氏（バーンスタインと音楽学部の同期）の指揮による演奏が印象に残ります。

Glorious Apollo（アポロンに栄えあれ）

ロンドン・グリークラブのためにウェブ（1740-1816）が 1787 年に作詞・作曲したグリー。ハーバード第一の愛唱曲です。ステージだけでなく毎回の打ち上げパーティでも一緒に歌います。

Beati Mortui（死者に祝福あれ）

メンデルスゾーン（1809-1847）作曲のラテン語による「二つの宗教的合唱曲」の１曲目で、ソリと合唱の掛け合い、そして流れるようなメロディーの印象深い曲です。

Ave Maria（アヴェ・マリア）

ドイツの作曲家ビーブル（1906-2001）は、ミュンヘン聖マリア教会の聖歌隊長やザルツブルグ・モーツアルテウム音楽院の助教授などを務めました。この曲は彼の代表作で、ハーバード・グリー、シャンティクリアはじめ多くの団体が演奏、最近では日本でもよく歌われるようになりました。グレゴリオ聖歌とソリ・合唱で構成された大変美しい曲です。

最上川舟歌

清水脩作曲の日本民謡を題材とした名曲で、現役ハーバード・グリーのレパートリーにもなっています。第７回長崎、第８回ホノルルでの合同ステージでは、１番、２番の掛け声独唱を両校で仲よく分け合いました。

Program Note

Stage Ⅲ

■MEESTE LAULUD : 男の歌 (Men's Songs) より

この曲集はエストニアの作曲家ヴェリオ・トルミス（1930-）の手による男声合唱曲集です。今ステージでは全10曲の内精選した６曲をお届けします。トルミスの作品は数多く、世界中で演奏され好評を博しています。その作品の大部分は、伝統的なエストニア民謡に依拠しており、確かな土着性を有しています。にもかかわらず私達日本人含め世界中が彼の作品に魅了されるのは何故か？それは依拠する民謡自体の魅力もさることながら、作品の魅力を最大限引き出す彼の卓抜なセンスにあると思います。リズム、和音、言葉といった様々な要素の中に散りばめられた彼の技巧、ユーモアをご堪能いただければ幸いです。

Meeste laul : Men's Song

名前から連想される通り力強い曲で、また五連符や七連符、グリッサンドといった、リズムや音の遊びが随所に散りばめられた粋な曲です。

Ehalkaimise-laul : Bundling Song

一曲目とはうって変ったミステリアスな曲です。徐々に、しかし確実に高まっていくもどかしさ、焦燥といった感情がメロディーと強弱によって表されています。

Kosjalaul Betrothal : Visit Song

求婚に向かう男の、緊張と興奮で高鳴る胸の内をそのまま表したような曲です。テナー系のメロディーは勿論、下の方でしかし陽気に奏されるベース系のヴォイス・パーカッションも聴きどころです。

Turgi soya laul : Song of the Turkish war

名前にwarとあるだけあり、意気軒昂として勢い溢れる曲です。無声音の掛け声やTopのAsの叫びといった要素が歌い手・聴き手双方を高揚させます。

Teomehe-laul : Self's Song

ゆったりとしながらも緊張感、張り詰めた雰囲気を持つ曲です。後ろで常にハミングかヴォカリーゼが鳴り、曲を引き締め続けます。そしてその中を哀愁漂う旋律が（主に内声）流れていきます。

Tantsulaul : Dancing Song

最後の曲にふさわしい華やかな曲です。擬声、強弱による遠近感、印象的なリズム、民謡的な和声といったこの曲集の魅力が凝縮されています。最後は手拍子とともに明るく締めくくられます。

Conductors

■藤田正浩

中学時代より合唱を始め、丸亀高校音楽部指揮者、京都大学グリークラブ第８期指揮者。京都コーロポリフォニコ、奈良市民合唱団等でルネサンスから現代まで様々な合唱を経験。ＯＢ会では第３回（東京・京都）、第６回（米国）、第７回（長崎）、第８回（ハワイ）のハーバードジョイントの他、上海コンサート等で指揮。他にタダタケを歌う会（男声）常任指揮者、Musikfreund（混声）団内指揮者を務める。

■松本朋大

京都大学工学部地球工学科４回生。高校の部活動で合唱の魅力を知る。全日本合唱コンクールでは金賞受賞。大学入学後、OB の縁もあり、グリークラブに入団。古代ギリシャ語をはじめとする多彩な言語、様々な作曲家の曲を経験。個性的な団員達にたじろぎつつも、バリトンのパートリーダー、副指揮者を経て、現在、第 46 期指揮者を務める。本当は指揮するより歌いたい。